

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第六十六回）

かきのものあそみひとまろ つくし
柿本朝臣人麻呂、筑紫の国に下る時に、くだ海路にして作る歌。うみじ

おおきみ

とほ

みかど

がよ

大君の 遠の朝廷と あり通ふ

しまと

かみよ

おも

島門を見れば 神代し思ほゆ

卷三―304

（解説）

1) わが大君（天皇）の治められる中央より遠く離れたお役所として人々がいつも往き来する島門を眺めていると、この島々が生み成された神代のごことが偲ばれる。

2) 題詞にある柿本朝臣人麻呂は持統く文武朝（687く707）頃に歌をもつて宮廷に仕えた宮廷の歌人的役割を果たしていた人物であったといわれる。ただ、人麻呂が筑紫（古くは九州全体を称した。）に下がったのはいつ頃か、何のために来たのか、また、どの辺りを通ったかもはっきりわからない。

3) 武田祐吉著『萬葉集全註釈』には「島門」は島のあいだの「海峡」をいう。但し、島は必ずしも小ささまざまな島でなくて、

水に面している地形ならばよいのであって、実際としては半島などでもあり得るのである。この歌は、その島門（海峡）を大君の遠方の御門と見立てたのである。大君の遠方の御門として人々の通う海峡をみればの意である。と述べている。

4) 「大君の遠の朝廷」は「地方で天皇の政治がおこなわれるところ」という言葉で、ここでは古代、地方では最大の役所、九州の「大宰府」（福岡県）であるとの説が有力である。

5) 「島門」の所在には諸説があるようであるが、題詞や歌から大宰府にあまり遠くない九州の北端（福岡県北九州市）と本州西端（山口県下関）との間にある関門海峡ではないかとの説がある。

6) この関門海峡は古からの交通の要衝であり、はるか都や故郷の思いが人々の胸に去来したことから万葉集には、貴人から名も知れぬ庶民まで、さまざまな思いが詠まれている。

7) 関門海峡の下関側からは海峡を通して対岸に北九州の町並みとその奥に九州の山々が遠くかさなりあっているのが見え、地形も島門として代表的なものであり、海峡の潮の流れも速く古代からほぼ変わらないと思われる雄大な景観を望むことが出来る。また、この地は神功皇后の三韓征途の時の伝説の地でもある。

このことから、この歌の詠われた地はここ関門海峡でないかと思われる。

(参考文献) 武田祐吉著『萬葉集全註釈』、中西進著「柿本人麻呂」日本史用語辞典

中村行利著「万葉と九州」他

(写生地) 瀬戸内海国立公園の最西端にあたり関門海峡に面する山口県下関市の「火の山公園(標高268m)」から海峡と対岸の九州風景。真下に1973(昭和四十八)年に完成した本州と九州を結ぶ関門橋を描く。(杏花)

